
女神湖伝説

きりもんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神湖伝説

【Zコード】

Z8682D

【作者名】

きりもんじ

【あらすじ】

(ラジオドラマ) 仲良し四人組がUFOの噂を聞きつけ信州の女神湖へと向かう。怪しい甘い香りがして人の声が聞こえ四人は湖底の洞窟へと落ちる。そこで四人は姫と若武者とにのり移り色々な時代を駆け巡る。そして・・・。(きりもんじ)

姫ヶ淵伝説（前書き）

これはラジオドラマのシナリオです。読みこへいでじょうがなうじ
くお願ひします。

姫ヶ淵伝説

蝉しぐれが聞こえる。

(カズのナレーション) 「そつあれば暑い真夏の信州だった」

蝉しぐれがずっと聞こえてる。

突然、車の爆音。加速、シフトダウンのギアの音。
タイヤのきしむ音。再び加速、ギアの音。

(ヒデ) 「おうとうとうと

(カズ) 「まだヘアピングが続くぞ」

タイヤのきしむ音。

(アキ) 「キヤー！」

(トラ) 「吐きやう

車の加速、シフトダウンのギア。
タイヤのきしみ。再び加速。
ターボでトップに入る。

(カズ) 「これで終わりだ。後は白樺湖まで一直線」

(トラ) 「あー、疲れた」

(ヒデ) 「白樺湖は通過して、女神湖まで行くんだね?」

(カズ) 「ああ、そうだ」

ここよりターボの音が続いている。

(アキ) 「女神湖、姫ヶ淵を探しに

(ヒデ) 「姫ヶ淵にはUFOの基地がある」

シフトダウンのギアの音。
加速の爆音。

(カズ) 「ここからまた坂道だ」
(トラ) 「ふう」
(アキ) 「トラ、大丈夫?」
(トラ) 「あー、大丈夫」
(ヒデ) 「カズ、ゆっくりと走ってくれ」
(カズ) 「あいよ」

「」のよいター・ボの音が続く。

(アキ) 「姫ヶ淵には昔から伝説があるのよ」
(ヒデ) 「ほう、どんな?」

タイヤのきしむ音。

(アキ) 「戦国の頃、諏訪城のお姫様が、武田の
荒武者に追いつめられて、恋仲の若者と一緒に
飛び込んだのが姫ヶ淵」

(ヒデ) 「そうだったのか」

姫ヶ淵伝説（後書き）

へい

御泉水湿原（前書き）

これはワジオアリマのシナリオです。読みこころでしようと
くお願いします。

御泉水湿原

ターボの心地よい響きが続いている。

(アキ) 「それだけじゃないのよ。一人が飛び込んだすぐその後に無数の蝶が舞い上がって」

(カズ) 「へー」

(アキ) 「最後にひとり美しく大きな紫色の蝶が一匹、空高く飛び去つて行つたんだって」

(カズ) 「で、その一人の死体は?」

(アキ) 「それが、いくら探しても見つかからなかつたらしいの」

(ヒテ) 「蝶になつたんだ」

(アキ) 「そう。天然記念物のあの蝶はその末裔よ」

(トラ) 「そうか、この辺にしかいないよな、

紫色のあのちょうひぢょ。とてもロマンチックですね」

急勾配、シフトダウンのギアの音。

サードで上る車の音。

(ヒテ) 「かなりきつい坂だ」

(カズ) 「白樺湖は通り過ぎた。もうちょっとで女神湖だ」

サードが続く。

(アキ) 「姫ヶ淵、そこがH.F.Oの基地だつて言うのよこの人は」

(ヒテ) 「うーん多分な。昔からそういう伝説がある」

(トラ) 「それも面白いですね」

ターボのトップに入る。

(カズ) 「見えてきた。あれが女神湖だ」

(アキ) 「まあ、可愛い湖」

(ヒデ) 「もう天まで届きそうだ」

(トラ) 「夜空の星は、きっと素敵でしょうね」

(カズのナレーション) 「高原ホテルとペンション街を離れると人家はなく、訪ねる人もいない。女神湖畔の車止めに車を止めて御泉水湿原林という所まで歩くことにした」

カツコウの声、小鳥のさえずり、

山鳩の飛び立つ音。砂利を踏む四人の足音。

(アキ) 「まあきれい、見てみて、すずらんにキスゲ、しゃくなげよ」

(ヒデ) 「それ、トリカブトじゃないの?」

(アキ) 「まあ、トリカブトやリンドウはまだ早いわ」

御泉湿原（後書き）

つづく

ルルモサベニコニシタ（繪書也）

この作品はラジオドラマです。読みこころでしようと頼
いします。

とても甘くていい香り

水のせせらぎ。滝の音。
木橋を歩むみんなの足音。

(トラ) 「きれいな滝だな」

(アキ) 「冬は凍るんでしょうね?」

(カズ) 「ああ、凍るさ。全てが綺麗にクリスタルの森になる」

変な鳥の鳴き声。急に飛び立つ大きな羽音。

(ヒテ) 「何か、薄暗くなってきたみたい」

ふくろうの声。がま蛙の声。

氣味の悪い声が不気味に響く。

みんなの砂利を歩く音。

(ヒテ) 「もう疲れた戻ろうよ、日が暮れる」

(カズ) 「そうだな腹も減つたことだし」

ふくろうの声。奇妙な鳥の声。
飛び立つ羽音。犬の遠吠え。

(アキ) 「急ぎましょー!」

(皆) 「ああ」

砂利道を走る音。

(カズ) 「いっただ」

砂利道を走る音。

(カズ) 「あそこに車が見える」

(ヒテ) 「もう真っ暗だ」

足音がアスファルトに変わる。

(アキ) 「やつと着いたわ」

(トラ) 「あー、疲れた」

車のドアを開け、乗る音。ドアを閉める音。

(カズ) 「やあ、ひと安心だ」

(アキ) 「もう真っ暗。曇つて星も見えない」

(監) 「ふう(ため息)」

(ヒテ) 「・・ジューースあつたよね?」

(アキ) 「あ、ここ、ここ」

(カズ) 「俺にもくれ」

ジューースを飲む音。

(ヒテ) 「あー、うまいー!」

(アキ) 「私にも」

(カズ) 「あー、うまかった。トラも飲めよ。ほら」

(トラ) 「ああ、ありがと!」

ジューースを飲む音。

(アキ) 「あー、おいしい」

トラが鼻で匂いを嗅いでいる。

(トラ) 「(くんくん)?」

(ヒテ) 「どうしたトラ?」

(トラ) 「(くんくん)何か匂つ」

(カズ) 「えつー何が?」

(トラ) 「いや、すいへんこ、いい香りだよ」

(アキ) 「そういえばさつき、ボート乗り場の林の中で
おじこせんが、落ち葉を燃やしていたわよ」

(ヒト) 「それだよ、それ！」

(トラ) 「皆は、匂いませんか？」

(ヒト) 「もういえば……」

じても甘べてこに香り（後書き）

つづく

不思議な洞窟（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしようと頼
いしま。

不思議な洞窟

そこで、ヒデが鼻でおこをかぐ。
皆もにおこをかぐ。

(カズ) 「いい匂いだ」

(アキ) 「ほんとにいい香り。体が深く沈んで行きそう」

(ヒデ) 「重たーい。体がなまりのよつに重たくなつてきた。
海の底に沈んでいくみたいに気持ち良ー・・・」

マツサージで両肩を叩くような心地よい音が続く。
音が次第に大きくなる。

ヒューと穴倉に吸い込まれる音。

ドサッ、ドサッと四人が底に落ちる音。

(カズ) 「(ヒロー) いてーっ！」

(アキ) 「(ヒロー) いたーい！」

(ヒデ) 「(ヒロー) おーいてて、洞窟のよつな穴倉のよつな？」

(トライ) 「シー。人の声が聞こえる。静かにして」

(ヒデ) 「ほんとかよ？」

(トライ) 「シーッ！」

ゆっくりと歩む音。水の雫が落ちる音。

小声が聞こえてくる。少しづつ大きくなる。
遠くの声で、

(仙人) 「なりませぬ、なりませぬ。
わがままを言つてはなりませぬぞ、アキ姫」

近くの声で、

(アキ) 「あき姫て私にそつくり」

(トラ) 「シーツ！」

遠くの声で、

(仙人) 「五百年に一度のこの機会を逃すと、次は一千五年まで、この四人は地上をさ迷うことになりますぞ」

(アキ) 「それでも姫はもう一度あの方にお会いしたいのじゃ」

(仙人) 「だだをこねてはなりませぬ！」

(アキ) 「どうしても会いたいのじゃー（泣く）」

(仙人) 「五百年でござりまするぞ。姫には耐えられませぬー。」

(アキ) 「絶対に耐えて見せますー（泣く）」

近くの声に変わる。

(仙人) 「しそうがないのう。それほどまでに言われるならば、
・・・ならば若武者三人を付けまするゆえ。和之進ー。」

(カズ) 「ははっ！」

(仙人) 「秀次郎！」

(ヒデ) 「ははっ！」

(仙人) 「虎之助！」

(トラ) 「ははっ！」

(仙人) 「五百年間、アキ姫を守り続けるのじゃぞ」

(三人) 「ははっ、かしこまつて候！」

(仙人) 「では、この四名に、天界のコンピューターに

地上の歴史をインプットする仕事を仰せ付ける。

その間に、姫の一日ぼれした若者を探し出せればよし。

探しなくとも、2005年の「日の出」の場所より、
天空へ飛び立つ。よいな！」

(三人) 「ははっ！」

声が遠のいていく。

(仙人) 「これに間に合わなければ、四人とも永遠に地上を
さ迷うことになる。よいな！絶対に遅れることなかれ！」

(四人) 「ははっ、かしこまつて候！」

不思議な洞窟（後書き）

つづく

アキ姫（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこころうがよろしくお願ひします。

アキ姫

遠くで大きな電源スイッチの入る音。
大画面が起動する音。
すぐ近くの声で、

(ヒデ) 「すげえ！ 大画面！」
(カズ) 「シーッ」

遠くの声。

(仙人) 「それでは、天界の第一指令。川中島の戦い！」

大画面の音高まる。声近づいて、

(仙人) 「よいか、この大画面をよく見るのじや。
現場に落とされたらもう仕舞いじや。徹底的に
情況を頭に入れとくこと。よいな！」

(四人) 「ははっ、かしこまつて候」

(仙人) 「こここの城が武田軍。その数2万数千。その半分が
今動き出す。こちらの山に上杉軍。その数2万。濃霧の中を

息を殺して全軍山を下り川を渡る。武田本隊も城を出て川を渡り
平原に陣を張る。1万2千の別働隊は山の裏手に進軍する。山の
上杉軍を追い出そうといつ戦法だが、上杉軍はもう山を下りている。

濃い霧の中、両軍間近で合間見えることになる。そこでじや。

四人は武田軍の本陣、旗本にのり移る。別働隊の合流を見るや、
謙信は自らの旗本数騎とともに、武田の本陣を中央突破していく。

謙信が馬上より信玄に打ちかかる名場面。この場に姫の慕つ若者が
おるやも知れぬ。しかと確認されたし

(四人) 「ははっ、かしこまつて候」

小型宇宙船の来る音。ピポ・パ・ピ・ポ・パ・
空中で停止、ホーバリングの音。

(仙人) 「これぞ特製超小型時空宇宙船。スペシャルスペースサテ
ライト。

略称3Sじゃ。近くまでわしが送つていぐ。さあ乗り込むぞ

ホーバリングの音が続いている。

3Sの乗り口が開く音。

ステップがセットされる音。

(仙人) 「ああ、このステップを登つて

ステップを登る音。

(アキ) 「いつのまにか鎧を着てる」

(カズ) 「ほんとだ」

(ヒテ) 「やっぱリUFOだ」

(トラ) 「あの香りは、マリファナ?」

(仙人) 「何をしゃべつておる。早くベルトを締めよ。
その若者が見つかったら、姫、オーアイクモ!と叫んで
下され。その場にこの船が現れ申す。おつとその前に、

大事なことを言い忘れておつた。この四人は、意識と
生命は共有しておるが、体は別々である。一人が死ぬと、

この洞窟基地へと全員瞬間移動し振り出しに戻る。
軽はずみな行動は厳に慎むようだ。よいな！」

(四人) 「ははっ、かしこまつて候」

アキ姫（後書き）

つづく

三中島（ミナミヤマ）

この作品はラジオドラマです。読みにこへじょうがよみこへお願いします。

川中島

35 発進の音。
音、遠のいていく。

ほら貝の音と馬のいななきが遠くに聞こえる。
群馬疾走の音、近づき遠ざかる。

近くの声。

(勘助) 「おやかた様」
(信玄) 「ふむ、車がかりの戦法か?」
(勘助) 「勘助一生の不覚。裏をかれました」

群馬疾走ひづめの音、近づく。
遠くで絶叫が聞こえる。

(トライ) 「きたぞーっ!」
(謙信) 「それ!一気に突き崩せ!」
(ヒテ) 「撃てーっ!」

一斉射撃の音。

うまのいななき。絶叫。

(謙信) 「ひるむな!突つ込め!」

絶叫。剣槍のかみ合ひの音。
矢の放たれる音。
馬のいななき。阿鼻叫喚。
ドバッと切られる音。

ブスツと刺される音。

断末魔の叫び。

(謙信)「信玄はあそこだ!」「

(勘助)「うおおー!山本勘助見参!謙信覚悟ー!」

弓矢の一斉発射の音。

遠くの声。

(ヒデ)「山本勘助殿!討ち死に!」

阿鼻叫喚。

遠くの声。

(ヒラ)「武田信繁殿!討ち死に!」

戦闘の音、遠のぐ。

近くの声。

(カズ)「おやかた様、今第九の陣が破られました」

(信玄)「ふむ、あと三陣を残すのみか。・・・・

・・・・・別働隊は、まだか?」

遠くで絶叫。

(ヒデ)「いま、風林火山の御旗が見えましたーっ!」

近くの声。

(信玄)「おお、やつと来たか!」

馬一騎のひづめの音、急速に近づく。

(信玄)「誰じゃ?あ奴は?」「

(カズ)「なにやつぞ!」

(謙信)「どけどけい!謙信参上!狙うは信玄ただひとつぞー!」

馬のひづめの乱れる音。

(アキ) 「おやかた様！幕の外へ！」

(信玄) 「逃げも隠れもせぬわ！」

馬のいななき。剣戟の音。

(謙信) 「南無毘沙門天！信玄覚悟！」

刀で軍配を切りつける音。

馬のいななき。乱れるひづめの音。

(信玄) 「何をこじやくな若造め！」

刀と軍配の切りあう音。

馬のいななき。乱れるひづめの音。

(謙信) 「信玄覚悟！」

(カズ) 「そうはさせじ。謙信、お命頂戴！」

(アキ) 「あつ、カズの進！だめーっ！」

ドバッと体を切られる音。

(四人) 「あつ、あああーっ！」

叫び声、遠のき消える。

川中島（後書き）

つづく

桶狭間（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでじょうがよろしくお願ひします。

桶狭間

洞窟、水の雫の音が響いている。

(アキ) 「あつ？」

(仙人) 「気が付いたか？」

(カズ) 「ううーん」

(ヒデ) 「いてててて」

(トラ) 「うーん」

(仙人) 「皆、気が付いたようじゃな」

(アキ) 「人探しどころじやなかつたわよ」

(仙人) 「そうじやろうな。戦闘現場はそれどころではないわな。
じゃがしかし、人間、必死の戦いをしている時が最も美しい。
すばやくその者の手を掴み、オーアイクモ！と叫ぶことじや」

(アキ) 「ぱつと掴んでオーアイクモ！ね」

(仙人) 「そうじや」

(アキ) 「皆、分かつた？今度こそ絶対つかまえようね！」

(3人) 「ははつ、かしこまつて候」

(アキ) 「で、どこへいくの今度？」

(仙人) 「それでは、同時代の桶狭間の戦いをのぞいてみよう。

今度は必ず若者を連れてまいられよ。天界の第一指令！
桶狭間の戦い！」

大きな電源スイッチの入る音。

大画面が起動する音。

(仙人) 「よいかここが桶狭間じや。今川義元は2万4千の大軍じ
やが
隊列が延びて、ここに桶狭間に5千の兵で本陣を張つた。早朝、この
報を
察知するや信長は直ちに出陣。熱田神宮へ向かつ。旗本や家来達が
必死

になつて追いかける。その数2千!その中にもぐり込むのじや。必ず
姫の探す若者があるはずじや。心して探し出しにこくお連れ申し上
げよ。
よいな!」

(四人) 「ははつ、かしこまつて候」

小型宇宙船(3S)が来る音。

ホーバリングの音。ピポパピボパピボバ。

ステップが下りる音。

四人が駆け上がる音。

(アキ) 「今度こそは必ず掴まる。みんなー早死にするなー!」

(三人) 「ははつ、かしこまつて候」

3S発進、遠ざかっていく。

一間一

稻妻、雷鳴、豪雨の音。

鎧武者が忍び歩む甲冑の音。

馬の鼻息。強い雨の音。

(トラ) 「もう少しの辛抱ぞ」

(カズ) 「激しい雨で今川ビもは」ひに付いておりませぬ

激しい雨の音。

(信長) 「皆のもの、止まれ！無用な旗指物は打ち捨てよー。
鉄砲火繩をぬらすな！大いに息を吸つて心して待機せよー。」

激しい雨の音。

(ヒデ) 「アキ姫、決して先駆けなさらぬよ！」

(アキ) 「分かつてある」

(カズ) 「絶対に私の背から離れてはなりませぬぞ」

(トラ) 「とにかく姫は若者を探してください」

(アキ) 「わかつておる。腕を掴んでオーケイクモ」

桶狭間（後書き）

つばく
べ

前田利家（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにくいでしょうがよろしくお願ひします。

前田利家

雨の音、次第に小さくなる。

(ヒテ) 「あつ、雨がやんだ」

(トツ) 「空が明るんできたぞ」

(信長) 「天の加護！今じや！全軍総攻撃！」

(全軍) 「うおーっ！」

鉄砲の一斉射撃音。弓矢の一斉射撃音。
群馬が駆け下る音。馬のいななき。

突撃の喊声。

(遠くの声) 「織田の軍勢だ！」

(〃) 「にげろーっ！」

(〃) 「逃げるなー踏みどりまつて戦え！」

(〃) 「わやーっ」

阿鼻叫喚。戦闘の音。

剣槍の響き。殺戮、断末魔の叫び。
音、遠のく。

歩む甲冑と砂利ふむ足音。

(トヲ) 「姫、離れてはなりませぬぞ」

(ヒテ) 「あつ、あつちから雑兵が！」

(カズ) 「どけつ、俺が切るー！」

乱れる甲冑と足音。剣戟の響き。

(遠くの声) 「おーりやーー！」

(カズ) 「ヒー。」

ドバッと切られる音。

(雑兵) 「うひー。」

ドサッと倒れる音。

(利家) 「かたじけない！貴殿天晴れ！清洲のものか？」

(カズ) 「いかにも。こちらはわが城主、清洲アキ殿じゃ。ぬしは？」

(利家) 「前田利家と申す。急ぐゆえ、これにて御免」

戦闘の音、遠くに聞こえる。

(信長) 「本陣は目の前ぞ！押せ押せー！」

近くの声。

(アキ) 「マエダトシイ。あの加賀百万石の？（大声で）みんな！今川の本陣へ向かうのじゃ！」

(トラ) 「姫、危のヒビキいます」

(アキ) 「前田利家殿を探すのじゃー！」

(ヒデ) 「分かりました、姫。絶対に私どもから離れてはなりません」

(カズ) 「本陣はあそこだー！」

阿鼻叫喚。戦闘の音。

(信長) 「あの円陣が今川の本陣ぞー！」

(遠くの声) 「お歯黒がいたぞーー！」

阿鼻叫喚。戦闘の音。

(遠くの声) 「今川義元討ち取つたりーー！」

大歓声が上がる。

(信長) 「勝ち闘用意！」

(全軍) 「おーっ！えいえいおーっ！えいえいおーっ！えいえいおーっ！

一つ！

前田利家（後書き）

つづく

ああ失敗（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにくいでしょ？がよろしくお願
いします。

ああ失敗

勝どきが遠くで続いている。

(力ズ) 「アキ姫、前田殿はあそこニ」

(アキ) 「あつ、あそこね」

砂利を歩みだす音。

(力ズ) 「前田殿」

(利家) 「これは清洲殿。残念じや、義元が首取れなんだ」

(力ズ) 「わが殿が貴殿に相談あり申す」

(利家) 「何? 相談とな?」

(アキ) 「前田殿、御免!」

乱れる足音。甲冑の音。

(利家) 「何をなさる、清洲殿」

(アキ) 「御免。オーイクモ!」

3S 瞬間出現の音。ボヨヨーン。

(四人) 「それっ!」

3S - 気に遠ざかる。ウイーン。

洞窟。水の雫の音が響いている。

3S が近づく音。ホーバリングの音。
ドアが開きステップが下りて、
五人が転げ落ちる音。

(仙人) 「おつ、戻つて来よつたな」

(利家) 「ややや、ここはどこじや?」

(カズ) 「地の底の皆」「いざれゐる」

(利家) 「今川の者か?」

(ヒデ) 「今川ではいざりぬ」

(利家) 「わしを桶狭間へ返してくれ。わしは信長殿に嫌われておるのじや。手柄を立てねばならぬのじやー」

(皆) 「・・・・・」

(仙人) 「アキ姫、このお方がアキ姫の一田ばれのお方か?」

(皆) 「・・・・・」

(アキ) 「ちよつと違うみたい」

(トラ) 「まだ戦は続いておりまする」

(カズ) 「前田殿! 急ぎ帰り支度を」

(仙人) 「わしが送つていぐ」

3Sが来る音。 ウィーン。

ドアが開きステップが下りる音。

(仙人) 「さ、前田殿!」

(利家) 「かたじけない」

3Sの飛び去る音。

(アキ) 「皆、『めーん!』

(トラ) 「難しいと思うよ

(ヒデ) 「そうだよな」

(カズ) 「姫、諦めてはなりませぬ。あと四百年あります。がんばりましょーう!」

(ヒデ・トラ) 「がんばりましょーう!」

(アキ) 「ありがとうございます、みんな!」

「35が戻つてくる音。ドアが開きステップ
がおりて、仙人が落ちる音。ドサッ。

（仙人）「ああ、疲れた。・・・姫！」

（アキ）「ごめんなさい」

（カズ）「我々が付いておりながら、誠に申し訳ない」

（アキ）「彼らは悪くないの。慌て者の私が悪いのよ。
叱らないでください。今度はうまくやりますから」

（仙人）「あと四百年もありますぞ」

（アキ）「全てはこれからです。今までのはウォーミングアップ
といふことと。ね、みんな！」

（カズ）「ははっ、これからが本番だと思われます。
我々も心して姫をお守りいたします」

（仙人）「ようし分かり申した。では少し飛ばして、
天界の第三指令に入る。新撰組、池田屋騒動じや」

ああ失敗（後書き）

つづく

新撰組（前書き）

この作品はラジオドラマです。読み起こしがよくないところもあ。

新撰組

大きな電源スイッチの入る音。
大画面が起動する音。

(仙人) 「これが京の町。鴨川の西北角、ここに池田屋がある。長州が京都を火の海にして天皇を誘拐するという極秘情報を得て新撰組は総力を挙げて長州テロリスト集団を探しておった。

近藤、沖田以下十名が四条から木屋町筋を北上。土方以下一二十四名が祇園を探索して池田屋で落ち合つことになつてゐる。姫と和之進は土方隊に付いて行け。秀次郎と虎之助は近藤隊と共に池田屋に入れ。くれぐれもすぐには切り殺されぬように」

35発進、遠のいていく音。

鳥の鳴き声。寺の鐘の音。
犬の遠吠えが聞こえる。
砂利道。忍び足の音。

(近藤) 「間違いない。おるぞ国賊長州が」
(ヒテ) 「二十人くらいか?」
(トラ) 「そんなもんじやね!」

(近藤) 「一階の奥が一番怪しい。踏み込んだら、わしら四人は上へ駆け上がる。お前達三名は下。他の三名は逃げる者を追え」

(全員) 「はー」

(近藤) 「よし、踏み込むぞ！」

開き戸を開ける音。

(近藤) 「新撰組だ！御用改めでござれるー。」

(主人) 「あああ、皆様方！御用改めでござりまするー。」

(近藤) 「ええいどけつ！やはり一階だな」

寺の鐘の音。犬の遠吠え。

砂利、二十四人が歩く音。

(カズ) 「土方さん！池田屋がー！」

はるか遠くの声。

(声) 「新撰組だ！逃げろー・ぎやーつー」

近くの声。

(土方) 「走れ！みんな！」

二十四人、駆け足の音。

(土方) 「井上隊の十人は正面から切り込めー。」

そつちの八人は裏へ回れ！一人も逃すな！」

(全員) 「ははっ！」

砂利をけつて足音遠ざかる。

アキのつぶやく声。

(アキ) 「かつこええわあ」

(土方) 「そこの二人！見慣れぬ顔だな？」

(カズ) 「新参でござりまする」

(土方) 「ああ、近藤の」

(アキ) 「（小声で）土方様」

(カズ) 「（小声で）なりませぬアキ姫。この方は」

(土方) 「お前か？近藤のせがれは。引っ込んでおれ！」

戦とは「うするものぞ。自ら切り込んでいくだけが能じやない」

剣戟の響き。悲鳴が途切れ途切れに聞こえる。

(土方) 「長州が出てくるぞ、構え！」

(アキ) 「かつこいい」

(カズ) 「なりませぬアキ姫。あの人は姫を幸せにする人ではありますぬ」

(アキ) 「でも……」

剣戟の響き。気合の声。

戸を蹴破り、乱れる足音。

(土方) 「できるだけ生け捕れ！」

(ヒテ) 「おー、カズ！姫は大丈夫か？」

(トラ) 「まだ長州が出てくるぞ！」

(アキ) 「どうしよう？」

(ヒテ) 「カズ！姫を守れ！来たぞ！」

戸を蹴破り乱れる足音。絶叫。

(トラ) 「姫！危ない！」

刺される音。ドスッ！

(アキ) 「あつ、カズ！死んじゃだめ！」

(カズ) 「絶対に、姫、なりませぬ、うつ」

(アキ) 「カズーッ（エコー）」

新撰組（後書き）

つじへ

Hコードのためのπ（複素数）

この作品はラジオドラマです。読みこべこと題こあすがよろしく
願いします。

Hリー・ゼのために

洞窟、水の零の音が響いている。
遠くでアキが泣いている。

(アキ) 「（鼻をすすりながら）バカバカ

こちらの声。

(仙人) 「難しかろうてなあ」

(カズ) 「申し訳ありませぬ」

(仙人) 「短時間で人の性格を見抜くのは、難しかろうて。
土方歳三を連れてきてても、まあ、すんなりとはいきますまいよ。
人の心の奥に潜む冷徹さを見抜くのは、姫、難しうござりまする
ぞ」

アキ、遠くで鼻をすすりながら泣いている。

(仙人) 「御三方。姫が泣きつかれて眠るまで、そして、
成長して目覚めるまで、そつとしておきましょうぞ」

(三人) 「ははっ」

『Hリー・ゼのために』のメロディーがずっと流れている。

(アキ) 「じい？姫の父、母は？」

(仙人) 「はっ、天界にて一千五年に姫が帰つてこられるのを、
心待ちにしておられます」

(アキ) 「そう・・・」

(仙人) 「まだ二百年あります。しっかりと姫の慕われる若者を
見つけ出し、共に天界までお連れするのがじいの役目でござります

る

(アキ) 「あと二百年か。一田ぼれした若者が、
どんな人だったか分からなくなつてきた」

(仙人) 「それでは困ります。姫のわがままで五百年間、
この地上で探し、見つけ出すのがお約束でござりまする」

(アキ) 「そうだつたね。あと二百年、がんばらーっと」

(仙人) 「頑張りましょう、姫様。意外と身近にその若者は・・・」

(アキ) 「えつ、今何か言つた?」

(仙人) 「いえ、何でもござりませぬ。ふー、やれやれ」

『エリーゼのために』が次第に消える。

洞窟、水の零の音が響く。

(カズ) 「三人揃いました」

(仙人) 「御三方。これよりいよいよ近代戦に入る。ますます
個性はなくなり、今までとは比較にならない大量の若者が、次々と
戦場で命を落としていく。悲しいことだ。姫をしつかりとお守りして
その若者を何とか探し出してくれ」

(三人) 「はつ、かしこまりました」

(カズ) 「敬礼!」

(ヒデ) 「いつのまにか陸軍になつてゐる」

(トラ) 「あつ、ほんとだ。今度はどこに?」

(仙人) 「一百三高地!」

(三人) 「一百三高地?」

大きな電源が入る音。

大画面が起動する音。

(仙人) 「ここが一百二高地じゃ。ここを落とせば旅順港。当時世界最強のロシアの基地。日露戦争の最激戦地じゃ。塹壕、鉄条網、トーチカの機関銃。何度も総攻撃をかけるが、全滅につぐ全滅。若者の死体が累々と折り重なっていく。総攻撃は中止され、いくつかの決死隊が結成された。その中へもぐり込むのじや必ずや姫の若者があるはずじや。しかと探し出し、ここへ連れて來ること。以上!」

(カズ) 「敬礼!」
(ヒテ、トラ) 「はつー!」

Hリーのためのπ（後書き）

へいじ

1.1.1.1. 韻律（韻律学）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしようと頼
いしま。

一百二高地

(アキ) 「わかりました。必ず眞の若者を見つけ出して連れてまいります」

(ヒト)「姫、起きておられたのですか?」

(トラ) 「何か少し大人びたみたい

(アキ) 「無駄口呂くじやないよーほら、行くよ皆ー。」

(ヒト) ああ、こわい

(カズ) 一姫に何か変化が?」

(仙人)「そのようじやの。では、参るぞ! 一百二十高地!」

「発進。遠のいていく。ウイーン。」

『天轉ニハノ音 天轉の戸

阿鼻叫喚。

(隊長)「いやー、ひりがねー。」
(全員)「おーーー！」

10数名の駆け足の音。ヒュンと弾の音。

機関銃の連射音。

(隊長) 「ふせーつ！ 壇壕へ入れーつ！」

ドサッと穴に飛び込む音。

大砲の音。突撃の音が遠くで聞こえている。

間近でヒュツと弾の音。

(隊長) 「うわー、ううつ！」

(カズ) 「あつ、隊長と副長がやられた！」

(皆) 「隊長！」

(隊長) 「とにかくトーチ力をやつつけて、この旗を掲げてくれ！ それをめがけて総攻撃が始まるーううつ！」

(ヒデ) 「カズ！ 指揮を取つてくれ！」

(トラ) 「旗は俺が持つ」

(カズ) 「よし！ ひるむな！ 頭を下げて全員突撃！」

(全員) 「オーッ！」

突撃の声。ラッパの音。機関銃の連射音。

阿鼻叫喚。断末魔の声。

(カズ) 「（あえぎながら）みんな無事か？」

(ヒデ) 「我々四人だけ生き残つております！」

(カズ) 「よし！ トーチ力に上るぞ！」

(三人) 「オーッ！」

四人、駆け出す音。大きな爆発音。

(カズ) 「やつたぞ！ 旗を立てろ！」

(トラ) 「よし！ それ！」

突撃ラッパがいたるところで鳴り響く。突撃の喚声。
ラッパの音次第に遠のいていく。

(アキ) 「私達以外皆死んでしまった。一体誰を探せばいいの?」

(カズ) 「姫!立ち上がっては危ない!」

ヒュンと間近に弾丸の音。

(カズ) 「うつ!うづづ」

(アキ) 「あつ!カズ!死んじゃだめ!」

(カズ) 「姫、ご無事で」

(アキ) 「二度までもお前は!死ぬな、カズ!」

戦場の音、遠ざかり消えていく。

一 (五百三) 高地 (後書き)

つづく。出張のため一週間お休みします。

神風特攻隊（前書き）

この作品はラジオドラマです。読み起こしがよろしくお願
いします。

(仙人) 「ふーむ、残念じやのう。もうちょっとなんじやが」

(トラ) 「なにが?」

(仙人) 「二人に愛が芽生えるのがじや。しつ、これは内緒じやぞ」

洞窟、水の零の音が響いている。

(アキ) 「またカズが撃たれた。いつも真っ先に死ぬのはカズだ」

(ヒデ) 「姫、それはカズがいつも姫を命がけで守つてある証です」

(トラ) 「そうです。その思いはとても我々一人には遠く及びません」

(アキ) 「そ、そつか。そうむきになるな二人とも。カズ、いつもすまんな」

(カズ) 「はつ、恐れ入りましてござりまする」

(仙人) 「(ごほん) あー、いよいよあと百年をきつてしもうた。

最後、これ一回限りじや」

(アキ) 「最後はどこへ?」

(仙人) 「神風特別攻撃隊!」

電源スイッチの入る音。

大画面起動の音。

(仙人) 「ここが鹿児島にある海軍神風特攻基地国分飛行場じや。ここからは九九式艦爆と言う二人乗りの特攻機が三七 キロ爆弾を抱えて、超低空から米艦に突つ込んでいった。非常に高い確率の

特攻で有名な所じや。もつ米軍主力部隊はこの沖縄まで来ておる。

一刻の猶予もならん。玉水隊出撃に間に合ひやうぢや。そつと

11番機と12番機の前にたて

プロペラの回転音が聞こえてくる。

(隊長)「以上のよつに早めに下降し超低空にて海面すれすれまつすぐに飛行せよ。もし前席絶命したとしても、後部偵視員操縦桿を確保し必中せしむこと。以上! 司令官殿に敬礼!」

プロペラの音高まる。

(司令官)「米軍主力部隊は沖縄の北方50キロに来ておる。神州不滅! 敵艦に体当たりし見事神風とならんことを、ここに切に願つておる。それでは杯をもて、かんぱい!」

杯を叩き割る音。

(カズ)「行くぞ! アキ姫!」

(アキ)「カズ」

(カズ)「どうした姫? 11番機に一人乗るのだ」

(アキ)「(小声で)カズ、とてもかつこいいよ」

(カズ)「姫、お急ぎ召されよ。しっかりと帽子振りの皆に敬礼してくだされよ」

神風特攻隊（後書き）

つぶや

ホーイクモー（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしゃがよひこへお願
いしま。

オーイクモ！

プロペラの音高鳴る。

(司令官) 「第28神風特別攻撃隊玉水隊、一番機発進！」

爆音と共に飛行機の飛び立つ音。

(声) 「必殺必中！ がんばれよ！」

プロペラの音高鳴る。

(司令官) 「玉水隊一一番機発進！」

爆音と共に飛び立つ音。

爆音と共に飛び立つ音。

爆音と共に飛び立つ音。

プロペラの音高鳴る。

(司令官) 「玉水隊11番機発進！」

爆音と共に飛び立つ音。

(カズ) 「姫、風防を開けて凛々しく敬礼をしてくださいー。」

(アキ) 「わかってる。敬礼」

(遠くの声) 「がんばれよー」

飛行機の音遠のいていく。

飛行中の爆音が続く。

(カズ) 「敵艦が見えたらすぐ超低空飛行に入る。
よく見張ってくれ。敵機にも注意」

(アキ) 「分かつたわ、カズ。あんたと心中ね

(カズ) 「ヒテとトラの1・2番機は付いて来てるか?」

(アキ) 「ぴつたり。ヒテが手を振ってる。あつ、雲。海面が見えなくなつたわ」

(カズ) 「少し高度を下げよう。雲が切れる」

対空砲火の炸裂音。

(アキ) 「わつ、真下にすゞい数の船!」

(カズ) 「よし! 一番でかいのを狙おう。あれだ!」

急降下の爆音。対空砲火の炸裂音。

(カズ) 「海面すれすれに飛行し、そのまま
体当たりをする。姫、お覚悟を!」

急降下の爆音。対空砲火音。

(アキ) 「大丈夫よ。覚悟はできてる。
思いつきり体当たりして」

爆音高鳴る。弾丸の音。ピシッ。

(カズ) 「うつ」

(アキ) 「カズ、大丈夫? しつかりして。
体当たりするまで死なないで! お願ひ!」

大爆発音。

(アキ) 「カズーツ！ オーイクモー！」

声、大きくエコーして消えていく。

オーイクモ！（後書き）

つづく

シテーだー（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしゃがよひこへお願
いしま。

じつだ！

遠くから奇妙な音が聞こえてくる。ワウンワウンワウン。
音、次第に近づいてくる。

大型宇宙船がホーバリングしながら下りてくる音。

ピポパピボパワウンワウン。音高まる。

(アキ) 「みてみて。眞見て！何か空から降りてきたわ」

(カズ) 「おおっ、すげえ！」

(ヒテ) 「わっ、まぶしい。なにこれ？大型じつ〇〇の母艦
じゃないか。ホンまもの見るの初めて。すうーーー！」

(トラ) 「見て。湖の底。小型宇宙船が輝きながら浮上してきた」

35が浮上する音。ウイーン。

ピポパワウンピポパワウンの音はずつとひびいている。

(アキ) 「すうーー。ドラマチック。光のトンネル！」

(ヒテ) 「かぐや姫とおんなじだ。小型宇宙船が、
湖面から空中へ、母艦に吸い込まれていく

電磁波の音。ビロリビロビロビ。

リズミカルなピポパピボパピボパの音が
ワウンワウンワウンの音に吸い込まれていく。

(全員) 「わあーすうーーー！」

ワウンワウンワウンワウンとこうつ母艦の音が急速に高まつ、
最高潮に達してバツと音がして、いきなり、

ウイーンと遠ざかっていく。

(ヒデ) 「ワープしたんだ!」

(トラ) 「一瞬だね」

(カズ) 「500年後か」

小鳥のさえずり。鶯の声。

(アキ) 「あ、夜が明けてる」

(カズ) 「オーライモつて誰か呼ばなかつた?」

(アキ) 「わたし、夢の中で叫んでた」

(カズ) 「やつぱりそうか。ここは女神湖」

(トラ) 「おれ、トイレ行きたい」

(ヒデ) 「トイレはボート乗り場の所だ。とにかく皆で行こう」

車のドアを開ける音。下りる音。ドアを閉める音。

(ヒデ) 「あっちだ!」

砂利をふむ音。

(アキ) 「あれ、昨日のおじさんだ」

庭を掃ぐ音。

(ヒデ) 「あ、千人に似てる」

(トラ) 「おはよつづります。すみません」

(老人) 「ああ、おはよ」

(トラ) 「ト、トイレはどうじでしようか?」

(老人) 「トイレは向こうのあの建物じや」

(皆) 「ありがとうござります」

つづく

仙人？（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにくいでしょうがよろしくお願
いします。

仙人？

砂利を駆ける足音。小鳥のさえずり。
水のせせらぎの音。庭を掃く音。
ゆっくりと砂利をふむ音。

(トラ) 「ああすつきりした」

(カズ) 「あのおじいさんに聞いてみよつ」

(アキ) 「そうね。姫が淵のこと?」

(ヒデ) 「そうそう、姫が淵」

庭を掃ぐ音。

砂利をふむ音、立ち止まり。

(アキ) 「すみません?」

(老人) 「なんじやな? 昨日はゆっくりと眠れたかな?」

(皆) 「はあ?」

(老人) 「ハツハツハ。夕方から朝まで皆大いびきじやつたぞ」「(カズ) 「あ、おじいさん、この近くに姫が淵という

小さな池があるのを」存知ありませんか?」

(老人) 「姫が淵は、この女神湖の底じや」

(ヒデ) 「この女神湖の底?」

(老人) 「そうじや。大雨が降ると必ず鉄砲水になるといつので、明治の中ごろに女神湖と白樺湖は人造湖として大掛かりに造成された。

それまでは一つとも小さな池だったんじや。蓼科山、別名女神山の影

を映すから女神湖と名付けられ、銅像まで建つてあるが、その昔は

今の御泉水の湿地帯のよつた沼じやつた。蝶が大量に舞う季節があつての。戦乱の頃に諏訪の姫が飛び込んで蝶になつたと言われとる」

(アキ) 「それだわ、姫ヶ淵伝説」

(老人) 「500年」とに天から船が舞い降りてくるといつ言い伝えもある」

(ヒデ) 「それそれ、UFの話も本当なんだ」

(老人) 「やうに」

(アキ) 「まだあるんですか?」

(トライ) 「あの匂いの事だと思つ」

(老人) 「その通り。この一帯はその昔麻の群生地じやつた。特殊な麻での。しびれ、麻酔はもとより、その煙をかぐと、大いなる幻覚に落とし込まれる。その香りがまた甘くとろりとしていて逃ががたい。戦国の忍者が煙で集団催眠にかけたのも、こここの麻だったのぢや。その実が冠の形をしているので「冠草。甘い夢を見るので甘夢草。忍者達は蹴毬の毬と罵にかけるとで毬罵と呼んでおつた」

(トライ) 「マリワナ!」

(老人) 「昭和にはいつて全て伐採されてしまつたのは残念じやが」

(トライ) 「今でもどこかに?」

(老人) 「あることはあるんじやろうハツハツハ」

(アキ) 「おじいさん、おいくつですか?」

(老人) 「ああ、わしはよう知らん。今度天からの船が来るまで、わしは生き続けにやならんのぢや、ワツハツハツハ」

(四三) 「おもろあつがいへりぞこもつた」

仙人？（後書き）

つづく

女神湖新伝説（前書き）

この作品はラジオドラマです。読み聞かせでしようとお願いします。

女神湖新伝説

(カズの) 「それから1週間後。俺たち4人は御礼を持って更なるデータを収集すべく女神湖へ向かった」

車の加速の音。爆音。

カーブをきしむタイヤの音。
シフトダウンのギアの音。

サードで上る音。

(ヒデ) 「かなりきつい坂だ」

(カズ) 「もうちょっとで女神湖だ」

ターボのトップに入る。

(ヒデ) 「見えてきた、見えてきた」

(アキ) 「その車止めに止めて」

ブレーキ、止まる音。

ドアが開いて下りる音。

(トラ) 「今日は匂わないなあ」

(カズ) 「そう毎日は匂わないさ」

(アキ) 「ほら、おみやげもって、ヒデ」

(ヒデ) 「あいよ。もっと一杯聞きださなきやな」

ドアを閉める音。

4人歩く砂利の音。

(アキ) 「ボート乗り場の受付が売店につながっている」

戸を開ける音。ギイ。

(アキ) 「『めんぐださ』」

(皆) 「『めんぐださ』」

奥から女の人の声。

(女) 「はーい。今開けたばかりなのですみません」

足音と声、近づく。

(女) 「はい、いらっしゃいます」

(アキ) 「あの、おじこちやんいらっしゃいますか?」

(女) 「おじこちやん?」ここにはおじこちやんなんていませんよ」

(ヒト) 「ええつ、うそー?」

(女) 「いいえ、ほんとです。私が週末だけ開けてるだけですから」

(カズ) 「一週間前の夕方と早朝、ここで庭を掃いておられる仙人
のような白ひげのおじいさんはおられません」

(女) 「おかしいえすね? 一週間前のその時間にはここは閉まつて
誰もいないはずです。この近辺にはペンションが10軒ありますが、
そのようなおじいさんはおられません」

(ヒト) 「ひとつからフランチとやつてきたんだ」

(ヒト) 「やうかもな?」

(アキ) 「とてもお世話をなったんですね、そのおじこちやんに」

(女) 「やうですか」

(アキ) 「とりあえずお十産、『家族で食べてくれださい』。ね、みんな、お礼言つて!」

(皆) 「どうもありがとうございました」

(女) 「それは、ひとつも」

4人砂利を歩む音。

(アキ) 「なんだつたんだろうね?」

(カズ) 「わからん?」

4人、アスファルトを歩む音。

車のドアを開け乗り込む音。

ドアを閉める音。

(トラ) 「あつ、見て、湖の底!」

(ヒテ) 「あつ、ひかつてる!」

3Sが浮上する音。ウイーン、ピボパピボパピボバ。

仙人のエコーの聞いた笑い声が、

3Sの音と共に遠ざかり消えていく。

(仙人) 「ワツハツハツハ(エコー) ···」

ウイーン…と消えていく。

(カズのN) 「そしてまた、新たなる女神湖伝説が生まれた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8682d/>

女神湖伝説

2010年10月13日17時06分発行